

著者紹介 大正4年生 慶大卒 法務省刑事局勤務 東京都新宿区百人町4—420新宿住宅R I 36 <主著>「次席検事」(第38回直木賞候補)「勝負師」(読売新聞小説入選作)「千人同心」ほか

妖怪時代 ■

著者 ■ 金川 太郎

発行者 ■ 大島 守正

発行所 ■ 番町書房

東京都港区赤坂青山北町四ノ五一外苑会館

電話東京(四〇三)三四一一(代表)

振替東京一五八四四

印刷 ■ 昭和四〇年一〇月二五日

発行 ■ 昭和四〇年一〇月三〇日

印刷 ■ 凸版印刷株式会社

製本 ■ 小泉製本株式会社

©Taro Kanagawa 1965 Tokyo Printed in Japan

検印廃止 定価 ■ 四五〇円

乱丁・落丁本はお取り替え致します

妖怪時代

目次 ■

目次 ■ 2

ウグイス色の封書 ■ 7

灰白色の建物 ■ 27

茶褐色の像 ■ 42

暗緑色の話題 ■ 56

肌色の思考 ■ 73

斑色の日 ■ 102

黒白の石庭 ■ 127

淡紫色の女 ■ 143

真紅の叫び ■ 169

黄土色の過去 ■ 191

焦茶色の過去 ■ 218

白蠟色の旅 ■ 240

青霧色の告白 ■ 270

琥珀色の死 ■ 290

バラ色の光 ■ 315

装幀 上口睦人

妖怪時代 ■

ウグイス色の封書

小針信也の生活のテンボが、大きく変動したのは、一度に三通の封書が配達された日からであった。

その日は水曜で、代日の休暇だった。

手のぬけない仕事がつづき、日曜日をフイにしたときは、暑い頃のこと、大きいぞと一時はがっかりしたもののだが、このような結果になってみると、次の休日は近いし、マンザラでない気がした。

やはり疲れていたとみえて、この日は、昼近くまで、ぐっすり眠った。眼がさめても、すぐに起きる気になれず、横になったままで、タバコを喫ったり新聞を読んだりして、グズグズした。近くのレストランで、朝食ぬきの昼飯を食ったのは、午後一時すぎであった。食べるかたはしばらく、逆に空腹をおぼえてゆくほどの快調さで、自分の健康状態にひそかに満足した。

——できるだけ空腹の状態にいる

これが、二十七歳の彼の持論である。なにごとによらず、満腹のときには手軽な安易さに甘えて、どうも闘志が鈍る。眠くなるのが一番困ると思っている。

銭湯のあく時間までレストランでねばって、一番乗りをした。湯上りのゆたかな気持で帰宅すると、室内に三通の封書が投げ込まれていたのである。南向きの二階建アパートで、北側は上も

下も廊下だけ。うなぎの寢床のように長いモルタル建築である。通り抜けは自由だから、郵便物も新聞も各室に直接届けてもらっている。それにしても、電話一本で何事も片付く現在の生活に、封書が一度に三通とは、めずらしい。

——おやおや

と心のなかで声をあげたほどだ。

一通は館正行からのものである。右上りのゴツイ字だ。学校時代から長い間見なれたものだが、それでも、なんとなくおかしくなる。おおむね内容の見当はつくが、なんと云ってきたか、ちょっと興味がある。

二通目は理髪屋の看板といっている赤青白の縁どりの航空便だ。赤木平八からにきまっている。奴も待望のブラジルに到着したのであろう。すると、これが、サンパウロ発第一便ということになるわけだ。香港とシンガポール発のものを、つづけてもらったのは、もう二ヵ月以上も前のことである。

——シンガポールの街は香港と大差ない。しかし、香港より上品でキレイで静かだ。香港の下町は最低じゃね。汚くて臭えや。お話にならんね。Y・W・C・Aの食堂でアイスクリームとスパゲッティを食べた。びっくりするほど、うまかった。パイナップルも新鮮で格別。おそろしく、暑い暑い。赤道が近いんだから、無理もねえか。

シンガポール発のものに、そんな他愛もないことが、たくさん書いてあった。ブラジル上陸第一歩の感想は、果たしてどうか。これにも触手は動く。

三通目は不思議なものだった。差出人の名がない。テイネイに書いてあるが、まるで記憶にな

い字体であった。

上等の紙質で、薄いウグイス色。あて名のところが朱色の線で細長くかこまれている。支那風の封筒だ。単なる広告文を送るにしては、きちんと封がしてあって、念がいりすぎているようだが、えてして、これでたまされる。

どれから開くかと、ちょっと迷ったが、順序で、まず館正行からのものを取り上げた。

便箋のあいだに、館の名刺が入っていた。ペンで名刺の右肩に「小針信也君です、よろしく」とあり、左に「大井能子様」とある。大井能子とは、館の親戚筋にあたる婦人だと聞いているだけで、こまかいことは一切知らない。大井商事といって、貿易関係の会社の社長だそうであるから、四、五十歳のお婆ちゃんにちがいないが、

「いつでも紹介してやる。会ってみろ。会って損することはない」と館が云っていた。

ひょっとすると、大きな収穫となるかも知れない。そんな予感がしないでもない。

なにやら、便箋に書いてある。それが、意外にも短かい英文とわかった。見ると、第一行目に、

——わが召使よ（マイ・サーバント）

とある。

思わず、ぶッと吹き出してしまった。

過日、信也は館あてにハガキを出している。大井能子女史なる人物への紹介状を送ってくれという意味の内容だった。電話で済むはずだが、イタズラ気をおこして、そのとき、簡単な英文でしたためた。そして、末尾に「貴下の召使より（ユアー・サーバント）」と添えて、相手の笑いを

さそったつもりであった。

ところが、館もさるものだ。これを逆用して、ぬけぬけと「わが召使よ」ときた。してやったりと、にやにやしている館の顔がみえるようである。

二人の英語の素養など知れたもので、長く書けば、たちまちボロが出る。常に短文のやりとりになるが、同じ学校の英文科を出ているので、時々、こうしたイタズラを二人はする。

——ご希望の紹介状を同封した。

現代が妖怪変化の時代たること、ゆめ忘るまじ。

そんな意味になるようだ。

妖怪変化の時代——とは、近頃、二人が好んで使う言葉である。グロテスク・タイムズと表現している。

原文は *Remember, this is the grotesque times* とあり、簡明平易ながら、バカに垢ぬけてい^{あか}るような気がする。いつの間に、腕をあげたのか。

すると、急にムラムラと奇妙な闘志をおぼえてきた。

机の上の時計は三時だった。

（場所は近い。これから出かけて、大井女史とやらの顔をおがんできてやるか——）
そう思った。

別に準備はいらない。湯にも入っているし、ヒゲもテイネイに剃ってある。

大急ぎで、髪に櫛^しを通し、着替えをした。

初対面に開襟シャツでいいかな——と、ちょっと気になったが、この暑さにムリすることもある。

るまいとハラをきめた。

（館の奴、なにをたくらんでいるか？）

それだった。

短かい文章ながら、なにかイワクありげで気になる。それをたしかめてみたい誘惑に負けたのである。

しばらく雨をみないせいで、戸外はほこりっぽく、午後の暑い陽射しがカッと照りつけていた。淡島から池ノ上駅に通ずる道路に出るまでに、ベツトリ首筋に汗をかいた。氣負って出てきたものの、急がねばならぬ要件ではなし、今日はゆっくり静養すべきだったかも知れないぞと、いささか後悔された。

いまでこそアパート住いだが、実は、このあたりで信也は生まれている。

幼いときの記憶だけでも、バスの淡島停留所付近の変貌が、一番はげしいように思われる。あのあたりは、背の高いケヤキの林で、夜はフクロウが悲しい声で鳴いていたものだ。道路も狭かった。近衛輜重兵聯隊の近傍も、夜の一人歩きはできないほどの淋しい通りであった。日の丸を描いた徳利や盃、尽忠報国と染めた手拭や小旗を売る店が、兵舎と反対側にズラリと並んでいて、東京のどまんなかにいることを疑わせるほど、郷土の臭いがした。

井ノ頭線が敷設されてから、沿線がみるみる発展した。奥地も同様、バスの大会社が進出してきて、あッという間に近代的に塗りがえられた観がある。それでも、世田谷区の中にあって、ながい間、最新の建築物と田舎じみた家並とが、奇妙な対照をみせていた場所であったといえるようだ。

その名残りは、いまでもある。渋谷から経堂に向かうバスの表通りは、日々整理されているが、ほんの少し横道に入ると、まるきり手がつけられずに、昔のまま放置してある。

信也のアパートのまわりもそれで、本通りに出るまでは、舗装もされていない小砂利の多い赤土の道で、雨のときは閉口する。その他にも、たくさん不満はあるが、幼時の折の記憶が捨てきれず、ただなつかしさにひかれて移り住んだ。現在では、他に適当な部屋をすすめられても、転居する意思はない。自分で考えている以上に、いまの生活に満足しているのかも知れない。

封を切っていない残りの手紙を、尻のポケットにつっこんでいる。どこでも読めるつもりでいたが、あいにくと、上りの井ノ頭線は団体客で混んでいた。

渋谷駅の一つ手前で降りた。

大井商事の位置は、百軒店の裏側にあたるはずである。駅を出て、短かい急な坂をあがり、道玄坂と平行する横道に折れて進むと、左手に四階建の小ぢんまりしたビルディングをみつけた。

思ったより立派な建物で、道路に四十五度の角度で接していた。建物の前は、車の出入に不由な程度の三角形の広場になっており、水はけを考慮に入れて、いくらか傾斜したコンクリートだった。

グリーンのビニールでできた晴雨兼用のアーチ型天幕が、玄関先から突き出ていて、まるで喫茶店にでも入ってゆくような錯覚をおぼえた。

小綺麗な受付嬢が、社長室は四階だと教えてくれた。セルフサービスのエレベーターを降りると、部厚い絨毯じゅうたんの廊下をへだてて、真向かいが硝子張りの社長秘書室になっていた。ちょうど、先客が社長室の中に消えるところであった。

受付嬢よりはるかに年上で、ととのっているが地味な容貌の秘書がいた。小机を前に坐っている姿には、既婚者のような落ちつきがみえた。英文と邦文のタイプライター机が別にあったが、眼の前の秘書のほかに、この室内に勤務する人の気配はなかった。

館の名刺に自分のものを添えて出した。秘書は来客名簿にティネイに書き込んでから、信也に会釈して、社長室に入った。間もなく姿をみせると、席にもどりながら、

「しばらく、お待ち願います」と云った。

信也は長椅子に腰をおろした。戸外の暑さを忘れているのは、適度に冷房がきいているからだ。と知った。待っている間に、書類をもった若い婦人が二人ほど、社長室を入ったり出たりした。不気味なほど静かであった。

ふと思ひ出して、赤木平八からの航空便を取り出した。手紙を読むには最適の時と場所であると思った。赤木独特の乱暴な字が、ブルーの便箋に躍っていた。

*

*

*

七月十日、朝九時、サントス着。下船手続、税関検査で、まる一日がかり。迎えの車に乗ったのが、午後九時。サンパウロ市まで、高速道路を時速一二〇キロでとばした。十時半、サンパウロ市のKさんの別荘に到着。一時間の休憩の後、同じ車で二時間、目的のK農場に着いた——と、ここまでは至極良好。いいか、ここまでは、良好。

翌日より仕事開始。朝五時から夕六時まで。おれの仕事は、八〇〇頭の肉牛と一〇〇頭の乳牛を管理すること。おれの下に、カマラーダ（ブラジル人の人夫）が五人。上に畜産係のE氏が

いる。E氏は北大卒だ。だが、氏は豚専門なので、牛にはノータッチ。事実上、牛全部はおれ一人の受持というわけ。着いたばかりで状況は何もわからぬ。おまけに、ブラジル人は日本語が一切ダメ。気が狂いそうだ。考えてもみろ、肉牛八〇〇頭に乳牛一〇〇頭だぜ。なまやさしい数ではないんだぞ。わかるだろうな。

* * *

赤木の絶叫する声が聞えるようで、おかしかった。

気がつくと、秘書の姿がみえない。席を立つ音も耳にしなかった。はてなと思った。

室内は水の底のように静かであった。

廊下を通る人影もない。

短かい間だったが、秘書の存在をすっかり忘れていた。それほど、手紙の内容に興味をおぼえた自分に、かえっておどろいた。

赤木平八は豪傑だと云われていた。

高校時代は剣道部のキャプテンで、信也や館と同クラスだった。人間より動物を相手にする仕事に性に合っているというので、獣医を志望したが、不幸にして東北大が不合格。やむなく、C大の畜産科を卒業することになった。学生の中から、信州や新潟の牧場にアルバイトに行き、早くから気宇雄大なところがあった。かねて、海外渡航協会を通じて、ブラジル行を希望していた。それが、今年になって、日本人経営のK農場と契約がととのい、ばたばたと渡航がきまった。

それにしても、三十未満の若さで、なんの縁故もなく、単身、サンパウロにおもむく心理は、一般の理解しがたいところであった。信也も館も、はじめのうちこそ、赤木の翻意を促すことに

努めたが、間もなくムダと知った。とかく、奇行の多い人物だし、云い出したら、誰の云うことも聞くものではない。あきらめて、この五月に盛大な歓送会を催して送り出している。

二人は赤木平八を「現代の妖怪」の一人に数えている。その妖怪が、新しい環境に、どのようにぶつかって行くか——これは、自分たちの将来を占う意味でも、尽きぬ興味だと云わねばならない。

*

*

*

五時に起床。コーヒーを飲んで、すぐに搾乳。九時に食事。その後、餌をやったり、病気の牛に注射したり、薬をつけたり——。午後一時に昼食。四時半頃まで、馬に乗って各牧場をまわる。六時まで、いろいろ雑用がある。誰も教えてくれるわけではない。馬に乗ることも、トラクターの運転も、注射も薬も、すべて自分の一存。しかも、全部が全部、ぶっつけ本番だ。乗馬と車は、内地で経験してなかったら、いまごろ、どうなっていたか、ぞっとするな。わからないことは、六時の夕食後、就寝時までの自分の時間に、本を調べる以外にない。給料は月に一〇〇〇クルゼイ（日本金二五〇〇円くらい）だ。これが、信じられるか。信じてくれなくても、いいぞ。しかしな、夕方、馬で山から帰ってくると、夕陽で山のスソの大広原におれとおれの馬の影が長々と映っている。たまらねえな。おれはこんなに大きな自分の影法師を見たことはないぞ。

*

*

*

赤木の手紙は延々とまだ先があるが、秘書の声で中断された。

「お待たせいたしました、どうぞ」

いつの間にか、秘書は自分の席にいた。